HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現 ： 中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として [全文の要約]
Author(s)	馬, 長城
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15069号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87721
Type	doctoral thesis
File Information	Changcheng_Ma_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　馬　長　城

学位論文題名
日本語と中国語の対照から見たアイヌ語の時間表現
―中国語の「過」とアイヌ語の「a」を中心として―

本論は序論、先行研究、考察、結論とまとめより構成されている。第 1 章は序論であり、主に本研究の背景、目的、方法論について説明している。また、本論でのアイヌ語のデータの扱い方、およびそのデータのアイヌ語における位置づけについても触れている。なお、アイヌ語のデータを使用する際に、注意すべきデータの特徴、表記についても述べている。

第 2 章は、アイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する先行研究である。本論は主にアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する対照研究を行うものであるため、先行研究における問題点を指摘し、その解決方法を明確にする。

第 3 章、第 4 章、第 5 章は、本論の中心的な部分である。従来の先行研究では、アイヌ語の「a」に関しても、中国語の「過」に関しても、文レベルとテキストレベルに分けての分析があまり見られない。本論は不十分なところもあるが、基本的に文レベルとテキストレベルのデータに分けることにする。

第 6 章は本論の研究結果をまとめる部分である。本論ではアイヌ語の「a」と中国語の「過」を対照して、文レベルとテキストレベルに分けて議論を行うが、得られた結果にはさらなる検討の余地がないわけではない。第 6 章の最後で、その問題点を提示し、今後の課題を述べる。

第 1 章　序論

アイヌ語と中国語は類型論的に、どちらもテンスを持たない言語である。また、アスペクト表現において、アイヌ語の継続形式「kor an」と「wa an」、完了形式「a」は中国語の継続形式「在（zai）」と「着（zhe）」、完了形式「過 guo」にほぼ対応している。本論は、日本語の時間表現における研究成果を参考したアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する対照言語学的な研究である。

対照（contrastive）言語学とは、寺村（1982：2-3）に従い、比較言語学の研究内容と区別し、言語間の親縁関係や系統をまったく問題とせず、それぞれの共時態をつき合わせて異同を観察してみようとするものである。また、本論は対照言語学のうち、井上（2002：3）でいう「対応記述型」の対照研究である。「対照記述型」の対照研究とは、二つの言語の類似と相違を共通の枠組みのもとで整理して記述することに重点を置くものである。

アイヌ語のいずれの方言においても、現在、話者数は少なく、実地調査は極めて困難である。そこで、本論では、実地調査を行う代わりに、これまでに公開されているアイヌ語の言語資料を研究データとする。また、公開されているアイヌ語の資料のうち、沙流方言の資料は最も豊富にあるため、本論はアイヌ語沙流方言を主な分析資料とする。なお、沙流方言と地理的に近いとされる千歳方言のデータも入手しやすいので、本論は沙流方言と千歳方言のデータを合わせて議論を行うことにする 。なお、本論は記述言語学の観点から、自然会話に近い言語データを基本データとしたい。故に、アイヌ語口承文芸のさまざまなジャンルから、叙述人称に関わらず、uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）、ukoysoytak（会話）の三種類のみを本論の基礎データとして使用することにする。なお、中国語の方は論者の内省に基づく「普通話」を言語データとしても用いる。

第 2 章　先行研究

第 2 章では、アイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する先行研究の問題点を指摘し、下記のようアイヌ語の「a」と中国語の「過」に関する課題を立てた。

まず、アイヌ語の「a」に関する課題は以下になる。

1. 「a」の意味機能はパーフェクト（Perfect）なのか、それともパーフェクティブ（Perfective）なのか、あるいはそれ以外なのか、もう一度議論する余地がある。
2. 「a」が表わす前のできごとと後ろのできごととの関連性について、時間表現における位置づけをさらに明確にする必要がある。
3. 「a」は平叙文の文末には立つことができない、疑問文の文末には立つことがあるという構文現象について、その理由を探る必要がある。
4. 「a」のテキストレベルにおける時間表現の機能を考究する必要がある。

そして、中国語の「過」に関する課題は以下のように洗い出した。

I. 文レベルとテキストレベルを区別して「過」の機能を議論する必要がある。
II. 文レベルにおいて「過$_1$」は文末助詞「了」と共起しないと文が終結しにくいという現象に対して、その理由を説明する必要がある。また、「過$_1$」と「過$_2$」の連続性を明確する必要がある。
III. テキストレベルにおいて「過$_1$」がなぜ文末に立たないのか、その理由を明確にする必要がある。また、テキストレベルの「過」と文レベルの「過」の連続性を検討する必要がある。

本論が特に従来の研究と異なっているのは、文レベルとテキストレベルを明確に区分したうえで議論を行ったことである。その理由は、アイヌ語の「a」に関する文レベルの研究があまり蓄積されておらず、文レベルでまだ解決されていない問題が数多く残されているからである。また、中国語の「過」については、これまで文末、従属節、修飾節に分けての議論が行われておらず、それぞれのレベルにおける議論での「過」の機能も定論になっていない。

第 3 章　考察：文レベルにおける「a」と「過」の意味機能

本論は第 3 章で文レベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」について考察を行った。その際、日本語のアスペクト研究における動詞分類および、アイヌ語の先行研究を参考し、アイヌ語の「a」と共起する動詞、及び中国語の「過」と共起する動詞の分類を行った。アイヌ語の「a」も、中国語の「過」も、文法論からすれば、厳密なアスペクト形式ではないが、その文法化の進んでいる程度から、準アスペクト形式であるとした。「a」がアスペクトの意味を表わす場合、従来「Perfective」とするか「Perfect」とするかの論争がこれまであったが、本論の検討によって、「a」は「Perfect」の意味を表わすと認められた。

また、中国語の「過」は継続形式「着」と共起しないのに対して、アイヌ語の「a」は継続形式と共起することができる。アイヌ語の動作継続を表わす「kor an」や結果継続を表わす「wa an」と共起する場合、「a」はやはり「Perfect」を表わしていることが確認できた。なお、英語の「Perfect Progressive」から見て、「kor an a」は主体動作動詞と共起すると、完結を問題とせず、最近の活動という意味が顕在化する。「wa an a」は主体変化動詞と共起すると、「今でも鮮明に存続している」という意味が顕在化することがわかった。

従来の研究では、中国語の「過」は完結を表わす「過$_1$」と「経験」を表わす「過$_2$」に分けられているが、本論は文末助詞「了」と共起することによる視点変換で「過$_1$」と「過$_2$」が互いに変換できることを確認した。

第 4 章　考察：文レベルにおける「a」と「過」の構文問題

第 4 章では、平叙文と疑問文におけるアイヌ語の助動詞「a」と中国語のアスペクト助詞「過」の構文現象を考察した。その際、日本語の平叙文と疑問文に関するモダリティ研究の成果を参考

にした。アイヌ語の「a」と中国語の「過₁」が平叙文の文末に立たないのはいずれも「継起性」を表わすためである。中国語の「過₁」もアイヌ語の「a」も、文の中の終止要素によって、「継起性」の次のできごとを求めるという性質が潜在化し、文を終止することができる。終止要素がない場合は、いずれも次のできごとを求めるため、次のできごとが言語化されないと、文が終わらない感じになる。

また、中国語の「過₁」と「過₂」は、同じく「継起性」を表わす「過」から、使用文脈によって分化したものだと考えられる。「過₁」は常に「了」を利用して現在時点とつながっているため、その視点は「次には」に置かれ、「継起性」が顕在化している。一方、「過₂」は現在関連性を持つ「了」と共起しないので、視点が「かつて」に置かれ、「継起性」が潜在化し、「次のできごと」との関連性が認識されにくくなるが、「次のできごと」が言語化された方が「過₂」の文はより完全な文として認められやすくなる。

なお、アイヌ語の「a」は諾否疑問文の文末に立つことができる。その理由は疑問文のイントネーションによってできごとの間の継起関係が表わされ、「a」の構文的条件が緩くなるのである。中国語の「過₁」はアイヌ語の「a」と異なり、常に「了」を利用して現在時点とつながっているため、諾否疑問文の文末には立たない。また、推測の段階であるが、アイヌ語の「a」が諾否疑問文の文末に立つのは、その文が想像内容に基づかない事実確認をするものになっているためである。想像内容に基づく事実確認の場合、「a」の諾否疑問文は「ruwe」を伴う必要がある。そして、疑問詞疑問文における中国語の「過₁」は諾否疑問文の場合と同じく、「了」を利用して現在時点とのつながりを持つ必要があるので、文末に立つことができない。また、これも推測になるが、アイヌ語の「a」の疑問詞疑問文で述べられたできごとはすでに事実になっているため、確実の態度を表現するには「ruwe」が使われる。そのため、「a」は疑問詞疑問文の文末に立つことができない。

第 5 章　考察：テキストにおける「a」と「過」の機能

第 5 章では、テキストレベルにおけるアイヌ語の「a」と中国語の「過」を考察した。テキストに関する文法の概念は、主に日本語の研究成果を参考にした。アイヌ語の「a」については、テキストレベルにおける「a」は、従属節に現れても、連体修飾節に現れても、同じく継起性というタクシス機能を表わす。さらに、従属節と連体修飾節における「a」は、未来を表わす助動詞「kusu ne」や継続形式「wa an」、「kor an」と共起することがあるので、これらの現象についても考察を行った。その結果、形式「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」における「kusu ne」、「wa an」、「kor an」が表わす未来や動作継続、結果継続の意味がすべて背景化し、「a」の継続性という機能がテキストで表面化していることがわかった。「kusu ne a」、「wa an a」、「kor an a」の機能は「a」に接近し、いずれも継起性を表わすことがわかった。なお、「wa an」自身はテキストレベルにおいて背景説明の役割を持ち、一時後退性を表わす。

そして、中国語の「過」と同様、「a」は継起性を表わすとき、一連のできごとの最後のできごとにつくことができない。すなわち、「a」は終止要素のないテキストの文末に立つことができない。「a」はやはりテキストレベルにおいても次のできごとを求めるので、「a」がテキストの末に立つと、そのテキストは未完結になってしまうのである。

なお、中国語の「過₁」と「過₂」はテキストレベルでは分けることができないが、同じく継起性を表わす「過」から分化したものだと考えられる。その基本的機能は継起性であり、文脈上、参照時点が明確にされ、あるいはできごとの間の関係が因果関係になっている場合、できごとの間の「次から次へと」という時間的順次性が緩くなり、先行性として解釈される場合がある。

第 6 章　結論とまとめ

第 3、4、5 章の考察の結果をまとめると、アイヌ語の「a」と中国語の「過」の基本的機能は継起性であると認められる。アイヌ語の「a」は継起性を持っているため、継起性の次のできごとを求めるという性質から、「a」は平叙文の文末には立たず、テキストレベルでは最後のできごとの後ろに立つことができない。中国語の「過」も同じである。ただ、「a」の方の機能が未分化なのに対して、中国語の「過」の基本的機能である継起性は使用文脈によって先行性に分化したりす

るのである。

以上、アイヌ語の「a」と中国語の「過」に関して、文レベルとテキストレベルに分けて考察した。しかしながら、アイヌ語のデータが限られているため、一部の考察が十分ではなかった。例えば、アイヌ語の「a」はテキストレベルではモダリティ形式とされる「ruwe ne（のである）」や「hawe ne（のである）」などとよく共起する。これらの形式は、「pe ne（ものである）」と同じく、できごとをいったん名詞化する。「a」がその名詞化されたできごとの後ろでどのような機能を表わしているのか、本論ではそこまで分析するにはいたらなかった。

また、中国語の「過」の「過$_1$」と「過$_2$」の機能分化についても議論が十分ではなかった。助動詞「過」は動詞の意味である「通過」と関わっているのだろうか。通時的な考察も合わせて行う必要がある。残された問題はまだまだ数多くある。これらの問題については、今後の課題としたい。